

防災視点でみる式根島

フィールドスタディーを通じて、初めて防災視点で式根島を見て回った。初めに訪れたのは、小の口公園である。ここでは、防災設備に目を向けた。公園内には防災設備の1つとして、防火水槽の標識が設置されていたが、その表記に問題があった。旧式の標識で「防火水槽」と表示されるべきところが「防火木槽」と誤解を招く可能性の高いフォント表記になっていた。このような標識の不備は、特に緊急時に混乱を招く原因となるため、早急に修正が必要だと感じた。

次に向かったのは、台風による被害が確認されている東要寺である。ここでは、強風によって倒れた大木を目の当たりにし、台風の威力を実感した。標高が高い場所であっても、風害の影響を免れることができないことを改めて認識し、台風対策として防風林の整備や建物の補強など、標高だけに頼らない防災対策が必要だと感じた。

その後、小学校を訪れ、避難所としての機能を評価した。この小学校は広い校舎を有し、避難所としての収容能力は十分であった。しかし、避難経路を示す標識が少なく、特に島外から訪れる人々や新しく島に移住した人々にとっては、避難経路が分かりにくいと感じた。この点に関しては、避難所までの道のりを明確に示す標識の追加が急務であると考えた。

最後に、与謝野晶子記念碑付近に設置された津波避難経路を確認したが、その整備状況には問題があった。矢印の向きが誤って温泉の方向を指しており、実際の避難時には混乱を招く可能性があった。また、避難経路自体が整備されておらず、草が茂り、蜘蛛の巣が張っている状態であった。このような環境では、緊急時の避難が困難になる恐れがある。さらに、道幅が狭く、万が一避難中に転倒者が出た場合、避難が停止するリスクもあるため、道幅の拡張と整備が必要である。また、夜間の避難に備えて照明設備の設置も求められると感じた。

これらの調査を通じて、式根島の防災インフラには改善の余地が多く、特に標識や避難経路の整備が重要であると強く感じた。今後、これらの課題に対して、早急かつ具体的な改善策を講じていく必要がある。観光客、そして住民を守るためにも民間での共有も強く促進されるべきだと感じた。